

## シリーズ被災地の声

最終回

## 被災地の声と私たち

震災と宗門のあり方について考える、シリーズ「被災地の声」。最終回は「被災地の声と私たち」というテーマです。浄土真宗本願寺派総合研究所が行ってきた支援活動の経験を通じて「一般化された声」よりも「二人ひとりの声」に向き合うことを大切にしたいという提案をします。

## 「未曾有」の事態

東日本大震災の直後「未曾有の事態」という表現が各メディアで見られました。そもそも「未曾有」とは仏教用語で「稀なこと」、「いまだかつてないこと」を意味し、日本では善悪吉凶のいずれの形容にも用いられてきたようです。現代に生きる私たちが直接体験してい

ないという意味では、東日本大震災はまさに「未曾有の事態」だと言えるでしょう。ですが、日本の歴史をひもとくと大きな自然災害は繰り返し起きていることが知られています。

親鸞聖人の生きられた時代も、災害や飢饉に人々が苦しんだ時代でした。親鸞聖人のお手紙には「なんといいっても、去年から今年にかけて、老少男女多くの人が、あいついで亡くなりましたこ

とは、悲しいことであります」と始まるものがあります。

この中の去年から今年というのは、一二五九年から一二六〇年にかけてのことであり「正嘉・正元の大飢饉」と呼ばれ「吾妻鏡」にも、多くの人が亡くなったことが記されています。

そこで聖人は「悲しい」という個人的な感情を吐露されています。

いくら過去の歴史上に同じようなことが起こっていても、実際に体験すると、何事にも代え難い衝撃を受けるものです。特に人の死に際しては、頭では諸行無常という真理を理解していても、耐え難い悲しみであると感ぜずにはいられない私たちです。私たちは東日本大震災に対して、何を考え、何をなすことができるのでしょうか。改めて考えてみたいと思います。

## 個別の感情に向き合うこと

東日本大震災の甚大さを語る際「二万

人の死者」と言われることがあります。もう一步視点を近づけると二万人の方が亡くなったということは、仮に一人の死者に対して五人の遺族を想定すると、一挙に十万人以上の方が遺族になったと言ったことができます。また、亡くなられた一人ひとりに目を向けると「老少男女を問わず多くの人びとが亡くなった」という事実がありました。

「将来のある若者が死んで、どうしてわしのような年寄りが生き残ってしまったのだらうか？」と自問される初老の男性と仮設住宅の片隅で時間を共にしたことがあります。

「走ってだらな、ななめ後ろで婆ちゃんが転んだのよ。それを見た若者がな、その婆ちゃんを助けに行った……。若けえのは婆ちゃんを背負ってな……。振り向いたら若けえの背中合掌してる婆ちゃんの姿が見えたよ。その婆ちゃんも、若者も助からねがった……。あのとき、どうしたら良かったんだべ

な……」

〔ボランティア僧侶「ハ〇ページ」〕

被災地に生きる人びとにとって、今を生きて生活していることは、あの日の多くの「死」と別なことがらではないのです。その心情は、いわゆる「サバイバーズギルド（生存者の罪悪感）」といった言葉でまとめられるような単純なものではないでしょう。その男性は生き残ることができて「よかった」のではなく「申し訳ない」という感情をお持ちで、「どうしたらよかつたのか」いまだにお悩みだったのです。

### 複雑化する声にならない声に

いま「被災地の声」は多種多様です。被災地は私たちが考えている以上に広く、被災された方は全国各地にいらつしやいます。しかし残念ながら「一般化された声」しか遠くには届いていないような気がしてなりません。

例えば、愛する人の死が語られている時に、可愛がついていたペットを亡くした人の悲しみの感情は封じ込めなければいけないのでしょうか。

家を失い保証を求める人の前では、家を建て直した喜びは表現できないのでしょうか。

震災以前から患<sup>わづら</sup>っている持病の話は、震災後に話してはならないのでしょうか。

「奇跡の一本松は復興の象徴」という記事を読んで、自分は「復興」から遅れをとってしまったという人の悩みや憤<sup>いきどお</sup>りは、誰にぶつければよいのでしょうか。

私たちは「一般化された声」とは反対の「一人ひとりの声にならない声」にこそ耳を傾けたいと思います。前回の「聴く」記事にもあるように、浄土真宗本願寺派総合研究所の関わる仮設住宅の訪問活動は、声を聞き出す、掘り起こす活動ではありません。漏<sup>も</sup>れてくる声をないがしろにせず、気<sup>いき</sup>持<sup>ち</sup>を丁寧<sup>ていねい</sup>に受け取り、

言葉にして相手に返す、そして一連の関わりを振り返り、反省する活動です。

このことは、他者との関わりにおいて決して特別なことではないようにも思われます。日本全国のお寺で日常的に大切にされていることだと思っております。

お寺は地域の方々との関わり、目の前にいらつしやる方との丁寧な関わりによって成り立つもので、「一人ひとりの声にならない声」に耳を傾けるのは被災地だけの話ではないと思うのです。

## これからの支援

「シリーズ被災地の声」第一回目は記録された被災地の声について、第二回目では被災地の声を聴く活動について紹介してまいりました。今回は被災地で活動する中で、宗教者、念仏者として何ができるのかについて考えたことを述べました。

震災から二年半を迎えることになりました。どうしても被災地の現状はひとくく

りにされ、被災者の心情も単一化されて伝えられている気がしてなりません。私自身は活動を継続する中で、当たり前のようにですが、一人ひとりに個別の苦しみや悲しみがあるということを教えられました。一人ひとり異なる感情を持つていらつしやるということに気づかされたのです。

親鸞聖人は飢饉に際して大変だと一般化せずに「悲しい」という自身の気持ちを描き出されました。それは、想像で物語るのではなく、一人ひとりに向き合うことを大切にされているが故に生まれてきた感情ではないでしょうか。

「過去にも同じようなことがあった」と片付けることができない私たち、悲しみを「未曾有」のものとしか感じることができない私たちに阿弥陀さまの慈悲は注がれています。「悲しい」というような個別の感情にこそ私たちは関わり続けたいと思います。

また、被災地での支援活動を通して改めて家族や身近な人びと、目の前の方の

苦しみや悲しみに耳を傾けることをはじめてみたいと私自身は考えています。

全三回の連載が、みなさまのこれからの支援のあり方を考える上での材料になれば幸いです。

(浄土真宗本願寺派総合研究所研究員 金澤豊)

\* 浄土真宗本願寺派総合研究所ホームページ

シ <http://j-soken.jp>